干し柿

伊東　さよ子

立春を十日も過ぎし今朝の陽は鳥居の枠をはみだしのぼる

結ばれたみくじに負けず緑さす新芽も伸びて榊は育つ

豊栄（とよさか）の舞いする子らの律正し千早の裳裾ひきずりながら

人の気をよみがえらせる氏神の杜はしんしん寒さに耐える

弘網を慕う人らが集い来て建てたいしぶみ村のたからよ

村人はのどもとすぎて忘れ去る元助翁（もとすけ）の碑は夏草の中

東海道（かいどう）の一キロ程の道筋に国旗揚がるはわずかに二軒

ほどよくに皮張り出した干し柿は甘さ引き出す北風を待つ

出来ぐあい毎日さわり確かめる干し柿シャツと並びゆれ居る

テーブルを走りまわりて接待す少し年増の今日の花嫁